

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520327

研究課題名(和文) 初期アメリカの体制反乱事件とその文化的・文学的影響に関する研究

研究課題名(英文) Civil Insurrections in Early America: Cultural Influence and Subversive Imagination  
in Popular American Literature

研究代表者

白川 恵子 (Shirakawa, Keiko)

同志社大学・文学部・教授

研究者番号：10388035

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、これまで文学・文化研究領域でほぼ注目されずにきた初期アメリカにおける組織的  
反乱事件 具体的には、独立革命直後に勃発したシェイズの叛乱(1789-87)および植民地時代のニューヨーク奴  
隷陰謀事件(1741) の概要を提示し、かつその歴史的重要性と文学的・文化的影響を探るものである。社会的不和  
・混乱を背景としたこれらの事件は、同時代の文学における体制転覆的想像力を喚起しただけでなく、共和政期、アン  
テベラム/ポストベラム期を経て、こんにちのアメリカ大衆文学においても、抵抗精神の発露による文学的生成に影響  
をもたらしていることを、多くの具体的文学作品の分析によって示した。

研究成果の概要(英文)：This project explores the historical/cultural significance of early America's  
civic/slave insurrections, such as Shays' Rebellion (1786-87) and the New York Conspiracy of 1741, the  
subversive imaginative appeal of which influenced the popular literature of the time, such as Stephen  
Burroughs' Memoirs (1798) and "Hay-Mow sermon"(1798). The cultural impact of the events has also extended  
further into recent American literary works by Jean Paradise, Philip McFarland, Ann Rinaldi and Mat  
Johnson. Thus, the spirit of civil resistance in early America is a quintessential part of popular  
American literature.

研究分野：人文学

キーワード：初期アメリカ 共和政期 アンテベラム期 組織的反乱 体制転覆 民衆奴隷 独立革命 奴隷叛乱

### 1. 研究開始当初の背景

白川は、前回の科研基盤研究(C)「アメリカ独立・建国神話の構築と南北戦争以前期の大衆文化受容との関連についての研究」(2008年4月-2012年3月)において、アメリカの伝説的英雄像表象と、建国の負の遺産継承について、例えば、リップード、ウィームズ、トムソン、オルコット等の作品分析を行い、同時に、国璽生成過程とネイティヴ・アメリカン政策との関連や、奴隷制問題の相続について考察してきたが、その過程で、常に意識したのは、体制や権力に対する民衆の抵抗意識と組織反乱を封じ込め、体制側へと取り込んでいく国家政策との狭間に存在する文化・文学表象空間の可能性であった。

本来、最たる体制転覆の革命行為であったはずの独立戦争が、英雄的行為と認知されるためには、いかなる言説操作が必要であったのか、また一旦は封じ込めた人種問題の「擦れ」が、後にどのような政治的・文化的影響をもたらしたのかについて取り組む過程で、独立革命前夜と建国直後に、建国神話の構築を目論む植民地/アメリカ政体に挑戦した反乱事件が多発していた事実、必然的に気づくに至った。

本研究が分析対象とする反乱事件は、いずれも程なく鎮圧されたものの、その後、ニューヨーク州における奴隷制廃止を促し、憲法を批准へと導く直接的要因となり、ジェファソンを中心とする民主共和党体制の確立を導いた。初期アメリカの民衆反乱が、アメリカ体制の確立基盤の強化に大きく貢献し、しかも文学的にも多くの素材を提供した点に鑑みれば、本件申請の研究は、前回申請研究の意識に通底する派生的発展であると同時に、分析・考察目標がより明確化・鮮明化された研究であると言える。

### 2. 研究の目的

本研究「初期アメリカの体制反逆事件とその文化的・文学的影響に関する研究」は、これまで文学・文化研究領域で、ほぼ注目されずにきた、初期アメリカにおける2つの組織的反乱事件の全容提示と、その文学的・文化的影響について考察することを目的とする。具体的には、(1)1741年、ニューヨークはマンハッタンで起こった奴隷反乱事件、(2)独立革命直後の1786-87年、政治的不安定さの中でアメリカが直面した、マサチューセッツ州スプリングフィールドにおけるシェイズによる農民反乱の論考を試みる。

独立革命の前後に勃発したこれらの組織的反乱事件に関しては、アメリカにおいて、各々個別の歴史的研究はなされているものの、それらの大方は、主に政治的、社会経済的関心に終始しているがために、事件に触発され創作された文学作品の分析を含んでおらず、のちの時代への文化的影響について考察・詳述した包括的研究も見あたらない。実際、調べていくと、これらの歴史的事件の影

響を色濃く受けて創作された作品、または直接、物語化した作品は、かなり発掘される。また、我が国のアメリカ史、アメリカ文化・文学研究においては、もとより初期アメリカの集団的組織反乱をまとめて紹介する書物がない。そのため、これらの反乱事件は、そもそもアメリカが国家の基盤理念とし、独立に際して大義名分として掲げた革命権の行使が、民衆によって試され、それが体制によって封じ込められた、いわば建国理念を転覆させる大事であるにも係らず、日本では、注目されてこなかったのが現状である。

こうした研究動向、殊に国内状況に対して一石を投じ、本研究は、まず反乱事件の全容を明示し、その上で同時代および後の時代への政治的・文化的影響を考察し、さらには関連文学作品の分析を試みる。実際、これら事件にまつわる関連作品は、予想以上に幅広く、こうした一連の研究によって、初期アメリカの重層的かつ矛盾に満ちた歴史背景と文学的な可能性を知らしめることを意図している。

### 3. 研究の方法

研究期間内に行う具体的な考察内容と分析対象とするテキストは、以下のとおり。

(1) ニューヨーク奴隷反乱事件 (New York Conspiracy of 1741)

ハイチ革命や、アメリカ南部における奴隷反乱計画(と実行)に関する考察には、多くの先行研究があり、例えば、Toussaint L'Ouverture Denmark Vesey, Nat Turner, John Brownらの反乱概要は、それなりに有名であるものの、一般認識として南部的「奇妙な制度」が及ばない北部においても、かつて奴隷が存在し、反乱計画が綿密になされていた事実は、あまり知られていない。こうした北部奴隷反乱の中でも、規模の大きかったNYでの事件の全容につき、T. J. Davisの*A Rumor of Revolt* (2007)、Mat Johnsonの*The Great Negro Plot* (1985)、Peter Charles Hofferの*The great New York Conspiracy of 1741* (2003)、Jill Leporeの*New York Burning* (2005)等の資料を参照の上、事実関係を明示し、その上で、独立革命との関連、また南北奴隷反乱の類似点および相違点を探る。ちなみに、本件に先立つ1712年にも、同地にて奴隷反乱計画が鎮圧されているので、この関連についても明らかにしたい。

(2) シェイズの反乱 (Shays' Rebellion, 1786-87)

シェイズの反乱そのものの歴史的概説や政体への影響研究は、すでにLeonard L. Richards, David P. Szatmary, Robert A. Grossがその成果を残しているが、私が分析を試みたいのは、特に以下の二点の文学作品、すなわち、Stephen Burroughsの*Memoirs of Stephen Burroughs* (『回想録』)および“Hay-Mow Sermon”(「乾草上での説教」)(ともに1798)で擲論されているシェイズの反

乱であり、さらには、Edward Bellamy の *The Duke of the Stockbridge* (1900) に描かれた集団的農民一揆のロマンスである。おそらく、パロウズ説教を含む作品分析とシェイズ反乱の関連を考察するのも、ベラミーに注目するのも、全くの新視点となるだろう。そもそもユートピア小説『顧みれば』(1888)で有名なベラミーが、なぜ世紀転換期にシェイズの反乱を物語化したのか。19世紀末の社会主義的理想主義の原点と、独立革命直後の組織反乱との間にどのような関連性が存在するのか。反乱概要を紹介するとともに、日本のみならず、アメリカにおいてすら全く取り上げられていない作品に光を当て考察する。

#### 4. 研究成果

(1) NY 奴隷反乱事件に関しては、国内外の複数学会での口頭発表を行い、事件概要と複雑な時代背景の概説は充実に行うことができた。それらは以下の〔学会発表〕欄が示す通りである。

異孝之は、かつてセイラムの魔女狩り(1691-92)をアメリカ独立の契機としてとらえたが、NY 奴隷反乱事件について探求する過程で、北米大陸における欧列強の覇権的対立構造に鑑みても、ないしはマンハッタン先端の要塞の重要性と、本件の窃盗事件が放火陰謀説から始まり、スペインスパイ陰謀説、さらにカトリック陰謀説へと発展する事件展開からしても、これが、もうひとつのアメリカ独立の契機であったとの意識を強くした。

また、本事件の文学作品を発掘する過程で、新たに Mat Johnson のグラフィック・ノベル *Papa Midnight* や、Pete Hamill, Philip McFarland, Ann Rinaldi による小説作品を見出すことができたのも、大きな収穫である。なお、本事件については、当初想定以上の歴史的文書および大衆小説作品群が見つかったため、すでに当該研究期間に一定の成果は挙げてはいるが、引き続き、研究を継続する予定である。

(2) シェイズの反乱と文学的影響との研究成果としては、反乱の影響をパロディ化して自伝に挿入したスティーブン・パロウズの作品に関して考察し、最終的に英書(共著)の章として出版できたことが大きな成果であった。シェイズの反乱そのものに対する関心が、文学領域研究者では希薄であるが、それ以上に、パロウズ研究は、おそらくは日本では他になされていないはずである。

ただし、当初予定していたベラミー作品に対する執筆に至らなかった点は、残念であり、これも継続課題として、今後取り組む所存である。おそらく、このベラミー作品の分析も、国内外ではばなされていない。

上記の設定研究に取り組む過程で、申請時に分析課題として予定していた事象やテキスト以外にも、関連するそれが見つかり、実際に成果となったのは、うれしい誤算であっ

た。例えばそれは、ナット・ターナーの最近の動向であったり、(1)に関連するアフリカ系アメリカ人の人種状況を反映する現代作家作品であったり、あるいはまたジェファソンの縁戚に当たるランドルフ家のスキャンダルであったり、はたまた先住民へのパッシングという人種マイノリティーの処世法であったりする。

以下に記された具体的な研究発表成果は、一見すると各々関連性が散漫で、無為に広範な話題を扱っているように見えるかもしれないが、抑圧されし者による抵抗精神の発露という意味では、本件研究テーマと直結し、またすべての論考の基本的枠組みは、内容的・構図的にも関連している。加えて、その時代背景には、必ず初期アメリカの残滓が、直接、間接を問わず見出せる。よって、継続分析課題を残し、さらなる発展の可能性を残しながらも、4年間で成した研究成果としては、おおむね、満足のいく発表件数であったといえるだろう。複数の研究成果を国内外に示すことができた点が一定の評価に値するだけでなく、次期科研課題へのテーマ的接続が適切に成しえていることも研究の好ましい成果の一部であると思われる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

白川恵子「ソローはあえて言わねども増殖するナット・ターナーのいま」『命の泉を求めて 日本ソロー学会50年の歩み』(創立50周年記念特別号)2015年10月、48-49頁。査読無。

Keiko Shirakawa, “The ‘Re’Discovery of the ‘Buried’ Truth and the Strategy of Racial Reconciliation in Sharon Ewell Foster’s *The Resurrection of Nat Turner*.” *Transformation of the Color Scheme in Global Society*. NAAAS & Affiliates 2014 Monograph Series. (Nov. 2014): 1291-1310. 査読無。

Keiko Shirakawa, “Passing as Native American Celebrities: Textual Performance and the Creation of Authenticity in A Sketch of the Life of Okah Tubbee.” *Doshisha Literature*. 56&57 (March 2014): 1-18. 査読有。

白川恵子「ナット・ターナーの再復活」第85回大会 Proceedings (日本英文学会)2013年9月、199-200頁。査読無。

Keiko Shirakawa, “Redemption and Reconciliation of the African and American Liberator in Sharon Ewell Foster’s *The*

Resurrection of Nat Turner.” 『同志社大学英語英文学研究』第 91 号、2013 年 3 月、39-61 頁。査読有。

白川恵子【書評】「一九世紀アメリカにおける「ダブル」を探る」庄子宏子著『アメリカスの文学的想像力 カリブからアメリカへ』『週刊読書人』2015 年 5 月 29 日号、5 頁。査読無。

白川恵子【書評】Michael T. Gilmore, *The War on Words: Slavery, Race, and Free Speech in American Literature*. 『英文学研究』(日本英文学会誌)第 90 巻、2013 年 12 月、105-110 頁。査読有。

林以知郎「海洋冒険物語の復権 もう一つの小説起源論」『英文学研究支部統合号』5 巻、2012 年 12 月、213-217 頁。査読無。

〔学会発表〕(計 10 件)

白川恵子【シンポジウム】『Nancy Randolph の幸福の追求 歴史・小説にみる Jefferson 周辺の the Mansion of Un/Happiness』シンポジウム・タイトル「アメリカ文学における幸福の追求とその行方」日本アメリカ文学会大 54 回全国大会(於：京都大学)2015 年 10 月。

白川恵子「ニューヨークの魔女狩り 奴隷反乱事件と小説化」黒人研究の会例会(於：京都キャンパスプラザ)2015 年 4 月。

Keiko Shirakawa, “New York Slave Conspiracy of 1741: Historical Explanation and Novelization.” The 2015 National Conference of the National Association of African American Studies and Affiliates in Baton Rouge LA, Feb. 2015.

白川恵子「ニューヨーク奴隷反乱事件(1741)に関する考察」日本アメリカ文学会東京支部例会分科会(於：慶應義塾大学)2014 年 9 月。

白川恵子【招待講演】「アンテベラム・ニューヨークの大衆的煽情物語 フォスター、トムソン、リップードから NY 奴隷反乱へ アフェクト理論とその応用」竹内勝徳科学研究(於：福岡大学・森の中の小さな図書館)2014 年 8 月。

Keiko Shirakawa, “Parody of Autobiography, Autobiographical Parody: George Thompson’s *My Life* and *The Autobiography of Petit Bunkum*.” Panel Presentation titled “Biographies II: Personal Journeys” The 2014 PCA/ACA National Conference in Chicag, IL. April 2014.

Keiko Shirakawa, “Redemption and Reconciliation of the African American Liberator in Sharon Ewell Foster’s *The Resurrection of Nat Turner*. The 2014 National Conference of the National Association of African American Studies & Affiliates in Baton Rouge, LA. Feb. 2014.

白川恵子「ツアラル島再訪 マット・ジョンソンの『ピム』における反転と反復」多民族研究会第 21 回全国大会(於：茨城大学)2013 年 12 月。

白川恵子【シンポジウム】「ナット・ターナーの再復活」シンポジウム・タイトル「英米文学の慰め」日本英文学会関西支部第 7 回大会(於：京都大学)2012 年 12 月。

林伊知郎【招待講演】「スパイと海賊 フェニモア・クーパーは苦手だとおっしゃる方のために」九州アメリカ文学会第 58 回大会(於：熊本大学)2012 年 5 月。

〔図書〕(計 8 件)

Keiko Shirakawa, *Ways of Being in Literary and Other Cultural Spaces* (Cambridge Scholars Publishing), Emeria Parpala Afana and Leo Loveday, eds. “American Victim, Rebel, and Authority in *Memoirs of Stephen Burroughs*” を執筆、2016 年、現在印刷中

白川恵子『幻想と怪奇の英文学 2 増殖進化編』(春風社)下楠昌谷編「フィラデルフィアの幽霊屋敷 マット・ジョンソンの『ラヴィング・デイ』における混血アイデンティティの呪縛と解放」を執筆、105-128 頁、2016 年、現在印刷中。

白川恵子『ジョン・ブラウンの屍を超えて 南北戦争とその時代』(金星堂)高橋勤他編「ジョン・ブラウンの意思を継ぐ 奴隷叛乱教唆の襲撃から奴隷部隊式の戦争へ」(コラム)を執筆、225-226 頁。

白川恵子『アメリカン・ロードの物語学』(金星堂)松本昇他編「ツアラル島再訪 マット・ジョンソンの『ピム』におけるダーク・ピーターズの復権」を執筆、155-172 頁、2015 年 3 月。

林以知郎『災害の物語学』(世界思想社)中良子編「難船体験とアメリカとの遭遇」を執筆、5-18 頁、2014 年 5 月。

白川恵子『エスニック研究のフロンティア』(金星堂)多民族研究会編「ある逃亡奴隷の奇妙なパッシングの一事例 オカ・チュビー、インディアン・パフォーマン

ス、モルモン・コネクション」を執筆、199-217  
頁、2014年3月。

白川恵子 『アメリカ文化 55 のキーワ  
ード』(ミネルヴァ書房) 笹田直人他編「詐欺  
師 アメリカ文化の『人気者』」、「通信販  
売(メールオーダー)システム 植民地時  
代からの伝統ビジネス」、「遊園地 平等と  
解放という幻想空間」(解説)を執筆、44-47  
頁、96-99頁、164-167頁、2013年11月。

白川恵子 『ソローとアメリカ精神 米  
文学の源流を求めて』(金星堂) 日本ソロー  
学会編「奴隷的不服従 ルイザ・メイ・オ  
ルコットのセンセーショナル・スリラーにお  
ける抵抗と復讐」を執筆、330-345頁、2012  
年10月。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

白川 恵子 (SHIRAKAWA, Keiko)  
同志社大学・文学部・教授  
研究者番号：10388035

### (2) 研究分担者

林 以知郎 (HAYASHI, Ichiro)  
同志社大学・文学部・教授  
研究者番号：90097858